

## 日本語教育実習最終レポート

私は日本語教育の授業を受けるまで、教師の立場になって考えたことがありませんでした。高校生の時にクラスの留学生に教えていたときも、「日本語教師」という日本語を教える専門の仕事があることは認識していなかったですし、私は話すことも人前に立つことも得意ではないので、教師になることはないと思っていました。大学で日本語教育の授業を受けようと決めたときも、日本語教師になるつもりはありませんでした。しかし、授業を重ねるたびに、日本語教師という仕事への興味が大きくなっていきました。

全ての実習を終えて、これまでのレポートと DVD を見返してみると、気持ちの変化や成長した部分がよく見えたので、その時の気持ちを書き残したり、映像で残したりすることは大切だなと思いました。初めて 10 分～15 分の授業をしたときは、見ている人は全員友達でしたが、前に立って授業をする、ということにとっても恥ずかしさがあり、前に立って“話す”ことと“授業をする”ことは違うなと思いました。DVD を見ても、表情は固く声のトーンも一定でした。2 回目の授業を見ても表情はあまり変わっておらず、声に関しては最初の第一声が小さく、聞き取りづらいところがありました。声は大きすぎても、キンキンしたような声でもダメで、学習者が聞き取りやすい声で話すことは授業を作る上でとても重要なことだと、実習授業を重ねるたびに思いました。最後の YMCA での実習では、第一声からはっきり、ゆっくり話すことを常に意識していたので、最初の DVD と比べると成長したと感じましたが、自信がないところだと声が小さくなることもあったので、そこは気を付けたいと思いました。表情は 3 年生の前期に行った授業でも苦労しましたが、「表情は暗いけど声は大きい」人や「表情は豊かだけど声は小さい」人は想像しにくい、ということを入れた最後の教壇実習に入ったので、声をはっきり出すことで表情も前期よりは自然になったと思いました。しかし、表情が大きな課題であることは変わらないので、もっと表情豊かになれるように頑張ろうと思いました。

日本語教育方法論演習Ⅱのレポートではアイコンタクトの難しさについて書いていました。私が初めて実際に授業を行ったときに、特に難しさを感じたのがアイコンタクトでした。今までは学習者の立場からしか見ていなかったのですが、そんなに難しいとは思っていませんでしたが、実際に前に立ってみると想像以上にバランスよく一人一人と目を合わせるのは大変でした。初めは人と人の間を見ていたり、黒板や教材を見たり、目が合っても先にそらしてしまったり、1 人と目を合わせるのにもとても苦労していました。前期に中国からの留学生に行った授業のように少人数だとできるのですが、人数が多くなれば多くなるほど難しくなります。YMCA での実習授業では、フラッシュカードや前に立って説明をしているときは、1 年生のときと比べると抵抗もなくなりよくなったと思いましたが、会話を読ませる時や黒板に貼っている教材を使って話す時は、まだ黒板に目が行きがちだったので、バランスよく 1 人 1 人と目を合わせられるようになりたいと思いました。そして、話している時間の半分以上は学習者を見るように心掛けようと思います。

私は教材を作るのは好きですが、1年生の時からレポートなどを見返すと、特に成長がよく分かりました。1番初めの授業でフラッシュカードを作ったときは、表にだけ文字を書いていたので、枚数も多く、1度使った後に次に使うカードがどこにあるのかわからず、1回1回探すのに時間がかかっていました。また、DVDでみると字が細く、YMCAのような20人くらいのクラスだと、後ろの人は見えにくいくらいの文字でした。教材の作り方一つをとっても、フラッシュカードを持つときは下を持つので持つところに文字がかからないようにしたり、めくるときは後ろから前にめくったり、教師は常に細心の注意を払っておかなければならないということ強く感じました。日本語教育の授業を受けるまでは、教師の立場になって考えることがなくただ授業を受けていただけだったので、「こんなところにも工夫があるのか」という学びと驚きの連続でした。YMCAでの教材準備でもできるだけ細かい部分まで気を付けるようにしましたが、同じグループの人に言われて気付くことも多かったので、改めて難しさを実感しました。しかし、1年生初めの何も知らないところから考えると、成長が1番分かりやすいと思いました。

そして、YMCAでの実習授業で私が怖いと思ったのが、アクセントとイントネーションです。3年生の前期までも難しさは感じていましたが、最後の教壇実習で自分が間違ったアクセントとイントネーションで発話すると学習者がそのまま覚えてしまうことをより痛感し、アクセントとイントネーションの重要性を感じました。アクセントとイントネーションは自分では間違っていることがわからないことが多いので、周りの人に聞いてもらったり、CDを聞いたりして、自信をもって話せるようにしようと思いました。

また、異文化間コミュニケーションの授業で学んだように、日本人の間でも異文化は生じるので、国籍や言語が違えばもっと異文化が生じます。あいづちやアイコンタクト、時間の感覚も人それぞれです。決められた時間の5分前に行くことが常識だと思っている人もいれば、準備ができていないと思って5分程度遅れていくのが常識だという人もいます。日本語教師として、ただことばを教えるだけでなくしっかりと異文化を理解し、「必ずしも自分の常識が相手の常識ではないと心に留めておくことはとても大切」ということを、3年間の授業と実習を通して実感できました。

異文化間コミュニケーションⅡの授業では「優しい日本語」について学び、日本語の奥深さを初めて知ることができました。英語やその他の言語と比べても、日本語は感情などを表すことばが豊富で、表現が豊かな言語だとあるテレビ番組で言っていましたが、この授業を受けて本当にそうだと思いました。ある海外のアーティストが木の葉からこぼれてくる陽の光という意味の日本語、「木漏れ日」ということばを知って、“英語には同じような意味を指すことばは存在しない。自然の神秘に対する美しい言葉”と言っていました。このような英語では表せない日本語があるように、他の国のことばでも表せないことばはあると思うので、そういった日本語の意味や奥深さをちゃんと伝えられるようになりたいと思いました。

3年間の授業を通してさまざまなことを学んできましたが、実習を終えた今、私が日本

語教師を目指すにあたって大切にしたいことがあります。それは「多様な学習者を理解する」ということです。中学校や高校と違い、日本語学校では国籍も言葉も年齢も様々です。この中で1人1人の多様性と上手く向き合うことはとても大切なことだと思いました。もちろんYMCAのような20人程のクラスでは、授業中に1人1人にたくさんの時間をかけることはできませんが、授業以外でもサポートできることはあります。例えば、学習者個人の学習スタイルもそれぞれであり、その人にあった学習スタイルを見つけ提供することも1つだと思います。日本語の上達には母国語の影響も大きく、タイの人は日本語の「つ」という発音が難しかったり、韓国の人には文の切れ目で語尾を伸ばす特徴があったり、母国語によって苦手な部分の特徴も違います。そういった特徴をしっかりと捉え、学習者個人の勉強の手助けをする、ということも1つです。日本語教師として、学習者1人1人としてしっかり寄り添い、学習者の多様性に対応できるような教師になるために、これからたくさんの経験を積んで成長していければと思います。